

研究題目 所属することが楽しくなる美術部
副 題 アートを多岐に考える活動

もくじ

1 研究の主旨、対象者

2 ねらい

3 過程と内容

- (1) 美術室の外へ出よう。他校の様子を知ろう。そうだ、練習試合（交流部活）に出かけよう。
- (2) 動いているものを描くのは、難しいけれど面白い！動物園での写生大会に参加しよう。
- (3) 作家の思いを知ろう。描かれた作品の背景を知ろう。美術館で作品と作者に出会う。
- (4) アートで繋がる。障がいのあるなしに関わらず一緒に制作する楽しさを感じよう。
- (5) ほんものを見に行こう。夏休みの美術館見学。
- (6) 地域や学校行事との関わり。アートで盛り上げ隊。
- (7) 体育館のステージバック制作で全校にアピール。
- (8) アートはお金にもなる？しめ縄などのお正月飾りを作って販売しよう！
- (9) 他校との合同展開催。つながる、広がる、響き合い、発信する仲間たち。

4 まとめ

長野県駒ヶ根市立東中学校 教諭 小山美香子

1 研究の主旨、対象者

主旨： 活発な活動を仕組み、所属することが楽しくなるように様々なアプローチをする。

対象者：美術部員（1～3年生 計35名）

大会もなければ、華々しい試合結果も残せない美術部。学校の中でも何をやっているのかわからないと捉えられ、美術室で絵をずっと描いていて面白いの？と、時に心ない言葉を投げかけられることもある美術部の生徒たちは、どんな気持ちで活動しているのだろうと常々思ってきた。今年度、顧問をして美術部の生徒たちにとっての地位向上と活動の充実を願って活動を組み立て、所属することが楽しくなる美術部というテーマで研究を行った。

2 わらい

本校の美術部に所属する35名の生徒たちにとって、日々の活動に意味や価値を見出し、自信を持って、生き生きと活動を行っていくことをねらいとする。また、美術＝アートの捉え方の幅を広げたい。

3 経過と内容

(1) 美術室の外へ出よう。他校の様子を知ろう。

そうだ、練習試合(交流部活)に出かけよう。

休日、他校へ赴き、交流部活を行った。内容は、クロッキー対決。人物クロッキーを一緒に行う。モデルは生徒たちの中から出し、ぐるりと囲んでクロッキーを行う。10分ポーズを4回ほど繰り返すと、かなり描き込んだ作品になる。学年ごとにできあがった作品を並べて、鑑賞し合ったり、票を入れたりする。自然と技術が高い生徒には多くの票が入り、自分の学校だけでは知り得なかった刺激を感じることができる。自分の絵とは違うタッチや、バランスの捉え、描き込み状況から多くの学びを得ることができる。普段の環境と違うところで描くのも刺激になる。2019年の2月から5月にかけて、4校に赴き、交流部活を行った。



丹念に描いていく



ポーズをする方も真剣



仕上がった作品の講評会

(2) 動いているものを描くのは、難しいけれど面白い! 動物園での写生大会に参加しよう。

5月、飯田市立動物園で毎年開催されている写生大会に参加した。動いている動物を描く機会は今までなく、各々動物園内を歩き回って、自分が描きたいと思う動物を選び、時間をかけてじっくりと描いた。ペンギン、猿、羊など、絵の具や色鉛筆などを使って描く姿が見られた。外で描く開放感も得られた。



思い思いの場所で、自分が選んだ動物をじっくりと描く時間はとても楽しそうだった。

(3) 作家の思いを知ろう。描かれた作品の背景を知ろう。美術館で作品と作者に出会う。

6月、アンフォルメル中川村美術館で開催された寺井茉莉子さんの個展に部員全員で行き、寺井さんの作品で対話型の鑑賞会を行った。作品世界を自分なりに考え、発表し、意見を出し合い、最後は寺井さん（作者）から作品が生まれた背景や作品に込めた思いを語っていただいた。作品が生み出される背景を知ること、より作品を理解することができることを知った。その後、美術館の中で自分自身が良いと感じた場所やモチーフを元に、生徒自身も作品制作を行った。アートが生み出される背景を知ることができた後の制作は、普段の作品とは少し違って見えるという感想もあった。



こうかな、こういうことかな？絵画を前に語っていくと、作者自身が驚くような見解や見取りが生まれる

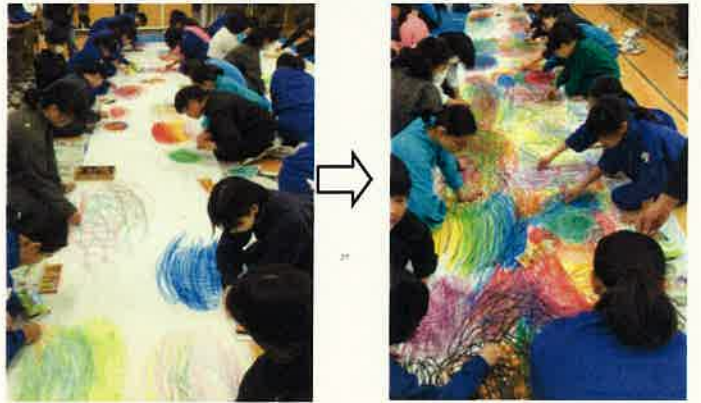


自分たちが描いた作品にアドバイスをもらう

(4) アートで繋がる。障がいのあるなしに関わらず一緒に制作する楽しさを感じよう。

7月、学校近くにある障がい者施設「西駒郷」の利用者の方と職員の方が来校し、一緒に大きな作品の制作に取り組んだ。形のない形…抽象形で描く大きな作品。クレヨンをぐるぐると描いていくが、利用者の方が嬉しそうに制作に取り組む姿に刺激を受け、もっといい色づかいにしたいという思いをもって描いた。「利用者の方があまりにも楽しそうなので、一緒に制作していてとても楽しかった。自由だった。」と感想を述べる生徒が多くいた。

制作テーマの説明を受ける 描く姿勢に刺激を受ける



どんどん制作は深まっていき…



完成！

続けて、西駒郷の職員の方にワークショップを企画していただく。テーマは「墨で自由に描いてみよう！」

最初はおそろおそろ、筆で書いていた生徒たちも、やがて手作りの描画材を工夫して形を表したり、かすかなかすれのようなものを集積して作品にしたり、果ては自分の髪の毛で描いてみたりと、自由な発想で表現方法や表現そのものを楽しむ姿が見られるようになった。形にとらわれずに解放されるように描く姿が印象的だった。



輪ゴムや布きれが良い表現につながる



なんとなく解放されていく気がする...



できあがった作品を手にして

(5) ほんものを見に行こう。夏休みの美術館見学。

8月、部員全員で貸し切りバスに乗り、安曇野の美術館見学に出かけた。碓山美術館、安曇野ちひろ美術館、絵本美術館での「いせひでこ展」などを鑑賞した。それぞれの作品の良さや技術面の確かさ、発想の持ち方など、ほんものの作品から多くの学びを得ることができた。フランスのパリやイタリアのフィレンツェなどの文化的に高い都市では子どものための美術館ツアーやワークショップが盛んだが、このようなほんものの作品と出会うことで得られる学びや発見は美術部に属している生徒だけでなく、多くの子どもたちに経験してほしいと思う。



碓山美術館で彫刻と同じポーズをとってみる身体で追体験をするのも良い鑑賞に繋がる



絵本美術館で館長さんから作品の説明を受ける。若い人たちに作品やその背景を知ってほしいと館長さんはおっしゃった。

(6) 地域や学校行事と関わり。アートで盛り上げ隊。

地域の天竜かっぱ祭りのポスターや看板を毎年依頼されているので、部員全員で描く。9月末には学校の文化祭で部活展を行った。11月、学校行事「ふるさとの日」のポスターやパンフレット、挿絵などを担当して情宣の部分でお役に立てるように力を尽くした。



北斎の海の絵に西駒ヶ岳を組み合わせたステージバックは好評だった。



(7) 体育館のステージバック制作で全校にアピール

体育館のステージバックの作品を年間5回入れ替えて制作している。季節に合わせたり、中体連の応援にしたり、文化祭に合わせたりと目を引くような作品になるようにしている。全校生徒や職員から評価してもらう機会となっている。



(8) アートはお金にもなる？しめ縄などのお正月飾りを作って販売しよう！

東中学校では、例年1年生を対象に地域の方によるしめ縄教室がある。よって、全校生徒が藁を縛うことができる。藁を使ったしめ縄に、色画用紙で立体的に作った花の飾りなどをつければ、お正月の飾りとして購入してくれる人がいるかもしれない…と考え、試作品を作ったところ、多くの方から購入したいという意志を示していただき、部員総出でしめ縄づくりが始まった。地域の方から提供して頂いた藁などを使い、完全手作りのしめ縄を製造し、12月、およそ120個販売することができた。アートはお金にも変わるという経験をする事ができた。





学校近くの郵便局に置いていただいたり、パン屋さんに入れていただいたり、懇談会中に生徒玄関で販売したりした。たくさんの方からお褒めの言葉をいただき、収益金で部員全員で温泉旅行に行くこともできた。

自分たちの手から生み出されたものに代金を支払って買ってください方がいるということは、活動自体を認められているということである。このような販売活動を通して、より良いものを作ろうという気持ちと自信が芽生えた。



(9) 他校との合同展開催。つながる、広がる、響き合い、発信する仲間たち。

交流部活を行った上伊那郡内の美術部5校が集まって、第1回美術部合同展を令和2年1月11日(土)～1月16日(木)伊那市の「かんでんぱホール」で開催した。これまで、校内の文化祭もしくは地域の文化祭で発表するに留まっていた美術部の作品を学校外のギャラリーに展示し、それぞれの作品の良さを感じとり、自分たちの制作の良さを知ってもらい、自信を持ってほしいという顧問会の願いのもとに実現した。土日祝日を中心に400名以上の来館者があり、「良い企画です。続けてほしい」「中学生がこんなに素晴らしい作品を描けるなんて驚いた。」「いろいろな作品を見ることができて楽しかった」等の意見をいただくことができた。



ギャラリーに作品展示をするのは初めてなので、うまくいかないこともあるが、それも経験。他校生と協力しあって、展示作業をした。展示の様子は地元の新聞やケーブルテレビ等でも記事やニュースにさせていただき、それを見て来館してくださる方もいた。皆さん様に「頑張っているね。応援しているよ。これからも楽しみにしているね。」とおっしゃっていた。と。

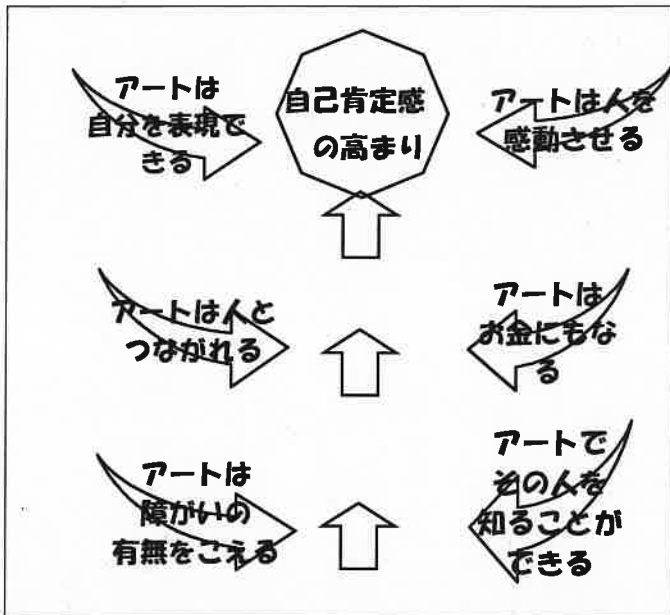


初めての受付

ずらりと作品が並ぶ



4 まとめ



今年度、様々な活動を行ってきた結果、生徒たちは自分たちの活動に自信を持って取り組み、美術部に所属していることに喜びを持っていることが感じられるようになった。校内でも、

「美術部の活動がすごい。」

「さすが美術部って作品だよな。」

「うちの学校の美術部は色々なことをやっている。」

「活動が面白そうでうらやましい。」

等々のお褒めの言葉をいただくことができた。

そもそも、なぜ美術部に入部したのだろうかという問いを生徒に投げかけると、「絵を描くことが好きだから。」という回答が一番多い。しかし、世の中のアートシーンは絵画だけにとどまらない。私自身も美術部に所属し、絵を描く時間が長い学生時代を過ごしたが、アートの世界に入ってみると、様々な表現方法があることが分かる。油彩、水彩、版画、デッサン等の絵画作品は、顔料を支持体に定着させる媒材（溶剤）が油ならば油彩になり、アラビアガムならば水彩になる。支持体（紙やキャンバスなど）に自分の手で顔料を乗せていくタブロー作品などは、自身が描いているという実感があるが、ペンタブなどで描くコンピューターグラフィックスの作品でも、描き慣れてくると自身の癖や個性が出てくる。石や鉄材などを使った大きな彫刻作品を制作している作家の中には、自身で素材を扱うことなく、作品のコンセプトを持って構造を組み立て、業者に制作を委託する場合もある。舞台芸術は、その場その場で消えていくアートであり、衣装や

舞台セットは残るが、役者の演技そのものは映像以外では残すことができない。芸術大学の先端芸術表現科では、芸術の持つ意味そのものを表現の問題として問いかけ、様々なプロジェクトに携わることでアートをツールとして物事を考え、解を導く。

中学校の美術部ではなかなかそのような多岐に渡るアートの考え方を伝えるのは難しさがあるが、美術室の中だからこそできることと、美術室から出るからこそできることの両面から活動を仕組むことで、より豊かな学びを得ることができると考える。

美術室の中で絵を描く。自己と向き合いながらじっくりと描く。形をとらえる技能や構成力がついてくると嬉しくなる。美術室の中に外からのお客様が来ると、新たな刺激を得て制作することができる。今回の西駒郷の職員の方が行ってくださったワークショップが良い例である。形にとらわれないクレヨンや墨を使った描写に心が解放されていく。障がいの有る無しにかかわらず、描くことでつながっていると実感することができる。美術室の外だからこそできることは、美術館に行き、ほんものの作品に出会ったり、自分たちの作品をギャラリーに飾ったり、販売活動を行ったりして、インプットやアウトプットを行う活動だ。様々な人との出会いがあり、褒めていただくと、気持ちがぐんっと上がる。嬉しいという気持ちがまた次の制作に向かわせる。作品展示を行うと、涙を流して喜んでくださる方がいる。「中学生の作品って良いわね。何か元気がでちゃう。」と嬉しそうに語ってくださる。自分たちの作品が人を感動させ、人の気持ちを動かすことを知ったとき、アートは力になる。アートは人の役に立つのだと実感することができる。美術室の中にずっといたのでは、そのようなことを感じるのは難しい。ただし、自分たちの力だけではないのだ。今回のしめ縄販売では、協力して販売して下さる郵便局の方がいたり、購入して下さる保護者の方がいたり、美術部合同展では、趣旨に賛同して一緒に展示をしてくれた他校の生徒や職員がいることを忘れてはならない。アートでつながっている仲間や自分たちのアート活動に協力して下さっている方々がいるからこそ部活動ができているのだということを忘れずにいたい。学んだことを更に発展させ、更に豊かな活動ができるように尽力していきたいと感じている。